



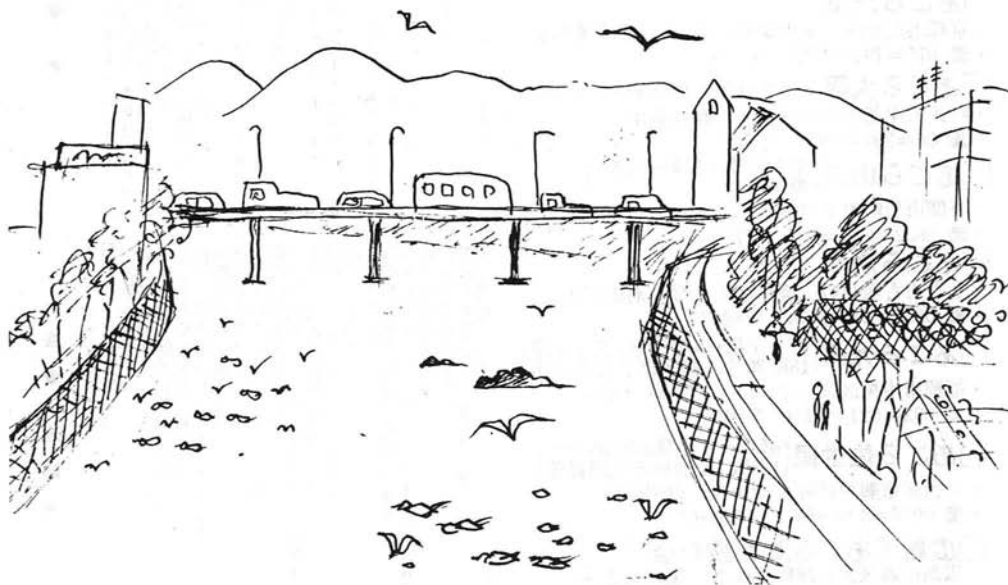
今月の編集は<あこら九州> 116号 400円

“女のネットワーキング”

私たちの選択……………	福田 光子…3
交流の縁……………	小島サカエ…4
ぐるうぶ紹介……………	9

“均等法”で職場は変わったか

希望の星たりえるか“均等法”……………	森崎 民子…14
“均等法”はひびかず……………	中野由美子…15
“均等法”で「女性活性化」のかけ声……………	池田 保子…16
残業も深夜業も依然として無制限……………	三好久美子…17
夫を“配偶者”として、家族手当・住宅手当を受給……………	石原 豊子…18
“均等法”を追って……………	甲木 京子…19
わたしの仕事<インタビュー>……………	田村 彪子…21
地域の新聞に見る“均等法・その後”……………	23
シニア・ウーマンズ報告 その2……………23	
「軍用地20年強制使用」と女たちの集い……………	島袋 由記…27
<連載>働き続けて40年(最終回)……………	辻 和子…30
私たちから見た辻和子……………	田辺聖子・吉行和子…31



福岡市を流れる室見川

一女の講座・女のつとめ

• 0166=65=5690 7078-11

• 011=644=2927 7063

• 0222=45=5994 7982-02

• 0474=91=4843(夜間) 7270-14

①②とも「あごら」読書室)

- ・新宿区新宿 1-9-6 斎藤千代
- ・☎ 03=354=3941 (BOC) 〒160

小澤幸夫・山田洋一（かわら版事務所）
小平幸夫・山田洋一（かわら版事務所）

- 0423=43=6749 下187

・名古屋市西区平中町90 長谷川友子

• 052=501=6969 7452

・京都市左京区一乗寺築田町56-1 塚崎美和子

• 075=791=4623 606

・吹田市岸部中1-29-4 藤井里子

• ☎ 06=387=6574 7564

・下関市佐々木町 2-12-5 2F

• ☎ 0832=32=8707 〒750

・鳥取市古海1147 高草団地9号 前田享子

• 0857=23=3074 7680

福岡市立中央区第1小(18時30分、福岡市立婦人

• 福岡市中央区笹丘2-4-6
☎ 092-531-7331 7332

あごら佐世保

・佐世保市瀬戸越町 3-21-8 肉田佳崇

• 0956=49=8591 7857-01

・広島市西区鈴が峰町5-3 黒田三恵子

• ☎ 082=278=2126 〒733

[illegible]

私たちの選択



福田光子

大濠公園は、いま冬の気配につつまれている。水面を埋めるほどの鴨の群れが羽を休め、さざ波が岸边を打つ。去年は大きな台風もなかったのに、それでも高い樹々が嵐のため立ち枯れて、そのまま佇立している。

とかく高い樹に風当たりは強い。折れないまでも、いためつけられて遂に立ち直れない。高くもなく低くもない一群れの樹々が互いによりそいあって冬の陽を浴び、いきいきと春を待つ風景をみていると、自然はいろいろなことを語りかける。

際立って高い樹から目立たぬ低い樹々まで、人間の集まる所にもさまざまな個性の渦巻く所に波立つものが風を呼ぶ。

人はなぜグループをつくるのだろうか。多様な個性を生かす道とグループ活動とが折り合えない場合をたくさん見てきたせいとか、個人と集団の間にはたらく緊張関係の事例を客観化してみること、はこれからの課題かもしれない。「女のケンカはウサギのケンカ」という題名にひかれて上野千鶴子さんの一文を読んだ。女性の自己中心性と他人に対する想像力の欠如を衝いている。

さて、ことし「へあごら九州」も発足してまる十年。「あたりまで普通の人」の集まりが、一番うまくいく、とどなたかが言われた。ひとつのグループが運動していく上で大切なことは、その内部での役割意識をキチンとそれぞれが持つことだと言った人がいた。へあごら九州にそれが当てはまるかどうか、自分たちのことは自分では案外わからない。

しかし、この十年、もし確かな歩みを刻んだこととして評価できるものを挙げるとしたら、へ福岡市婦人団体交流会の結成に、主体的にかかわったことだろうと私は思う。

いろんなグループがひとつの輪につらなるということは、言葉の上では「連帯」とひとことでいうけれど、必要の度合いが質量共に一致していなかったら、輪はゆるむか切れるかしてしまう。この一致を共通認識として保つために、それぞれのグループが、この点だけは、という共通点で結ばれることしかない。

十幾つもあるグループはみんな発生の動機も違うし、支持する政党もまた信ずる宗教も違う。そ

れを承知の上で末長くつきあっていこうという選択の意味は何なのだろう。

お互いの情報が豊富になるからか。

個々の力の弱さも束ねれば超能力を発揮できると期待するからだろうか。

それもさることながら、自分たちのひとりよがりや思い上がりが、外からの光であぶり出される自浄作用が期待できるのではなからうか。

どのグループも、それぞれすばらしい人たちがささえている。この出会いがまた、かけがえのない貴重なものだ。もろもろの期待の中に〈福岡市婦人団体交流会〉は生まれ〈あこら九州〉も、その輪につらなった。これは私たちの選択である。

〈あこら九州〉の代表選手のような立場で常に「交流会」との接点にあって、ある時は慎重に、ある時は決断をもって活動をすすめてきた小島サカエさんに、今日までの歩みを記録していただく。

交流の縁（えにし）

——福岡市婦人団体交流会の七年——

小島サカエ

福岡市立婦人教育会館十周年記念参加行事として、近く行なう〈交流会〉主催の講演会に会館が特別に全面協力しようとの思いがけぬ話に、福岡YWCAの湯口さん、日本婦人会議福岡支部の末永さんたちと中村イツ子館長たちとの打ち合わせの帰途だった。

今春早々の暮れなずむ街をコートのかを立てながら「あの頃から思うと何だか隔世の感ねえ」と誰からともなく言った。「ほんと、ほんとよねえ」と、私は大きくうなずきながら、〈福岡市婦人団体交流会〉の七年の歳月を思っていた。

いま私たちはこれまでの運動にふさわしい行事をと、テーマ「終わりのなき旅——中国残留孤児の歴史と現在」講師井出孫六氏（直木賞、大佛次郎賞受賞 作家）。とき・二月二十八日午後二時。ところ・福岡市立婦人会館

と決定。幸い井出さんは福田光子さん（あごら責任者）の実弟で、姉貴の押してムリを聞いていただいたのではないかと思うが、当日を楽しみにしているとの多くの声を背に、メンバーはいま準備中である。

「国際婦人年の十年」の中間年、一九八〇年、九州福岡の中央にある福岡市立婦人会館で、自主的に学習、実践活動する「あごら九州」ははじめ各婦人団体が「婦人の地位向上のため、平等、発展、平和をめざし、ゆるやかに手をつなごう」と、イデオロギー、政党、宗派を超え、「福岡婦人団体交流会」を結成した。

「あごら九州、国際婦人年を考える福岡の会、木の会、新日本婦人の会、日本婦人会議福岡支部、福岡あんふぁんて、福岡市地域婦人会連絡協議会、福岡主婦同盟、福岡・女性と職業研究会、福岡YWCA、婦人民主クラブ、婦人問題研究会、民主主義を守る婦人の会、——参加団体十三。

会員十数人の団体から数百人会員の団体など、私たちは組織の大小を問わず、各団体の個性を尊重し、「草の根」運動を基本にしている。（現在・第二期代表「福岡YWCA」湯口さん、「日本婦人会議福岡支部」末永さん。第一期は「福岡主婦同盟」柳生さんと「あごら九州」小島が代表に）。

一九八〇年のコペンハーゲンの世界婦人会議へ「あごら」が参加。自主フォーラムなどで活躍したことは「あごら」本誌23号「女たちはいま変わる」の特集に掲載されているが、私も九州から一人、ただくっついて行った。人種、国を問わず会議に集う世界の女たちのエネルギーに圧倒されたその時の印象はいまも鮮明に残っているが、貧乏性なのか、ノボセ性なのか、「参加したあの感動を何とか！」の宿題を背負った思いが、だんだんつのっていった。

時勢も「女性差別撤廃条約批准をめざして——」世界的婦人運動の高まる社会背景の中、ここ福岡の地でも、「連帯しよう……」のきざしのほの明かりに、「エイッ」と大胆にも私は、他団体へ呼びかけようと決心した。

福田さんはじめ「あごら九州」メンバーの後押しに、おずおずした心を励まし、まず婦人問題にくだわしい田辺幸子さん（元RKB部長、あごら会員）にご相談。そして今は亡き高木葉子さん（福岡教育大教授、女性と職業研究会代表、あごら会員）に、「おやんなさい！一緒にがんばりましょう」と、簡潔だが力強い言葉とともにたちまち始まった行動力はさすがだった。田辺さんはジャーナリストとして第一線で活躍。鋭い感性と豊かな人

間性。高木さんは学究の人であるとともに〈家庭科男女共修（学）をすすめる会〉の責任者の一人。この方たちと〈あこら〉を通して交流があり、あらためて運動の「縁（えにし）」を思ったものである。

〈あこら九州〉結成三年余の駆け出し草の根グループの呼びかけは、向こう見ずにもかかわらず、われわれの熱意に、婦人団体名や事情などくわしい、当時の福岡市立婦人会館館長 橋本氏は応え、〈交流会〉誕生育成に力をそいで頂いたことなど、スタート時、殊に「よき人たちを得る」こと、「心の駆け込み寺」ともいふべき応援者がいることが、事の成否のカギを握ると思われた。

しかし、大きな支えがあったにもかかわらず、実際軌道に乗り出すまでは難航した。

最初婦人会館館長の呼びかけで、主な婦人団体十八団体が何回か集まって、〈あこら九州〉ははじめ責任団体も決まったものの、中には、皇居掃除を自慢の勇ましい某婦人会長の、一年間毎回息もつかせずの、独演会にマイツた。

結成後一九八二年、「何か行事を」と、まず、身近で大きなことでありながら知らない人が多い「家庭科男女共修（学）問題を考える」の講演会をした。講師は高木葉子さん。主婦たちの間でも「目を覚まされた」という声が多く、反響も大きく、いい会だった。

次いで、福岡大空襲をうけた一九四五年六月十九日を記念して、「6・19平和のつどい」をやるうと企画の頃だった。

内外からの中傷、誹謗がひどく、「女賢うて牛売りそこなう」というでしょ」「どこそこの団体にはウラに男がいるんですヨ」など時代がかった非難や、「平和のためには、私の息子も軍隊に出す。交流会のような団体はキツとつぶれる」などのセリフを後に、長年、市の婦人団体の重鎮といわれる人を含む五団体が結束して脱会。本来ならば、その時これらの人たちと向き合って論議すべきだったとも思うが、その時間とエネルギーはとてまなかった。

私は空しさと怒りを、庭の草をムシり取り、穴へ声を出してぶちまけること、家族に当たること（ゴメンネ）などで、どうにかやり過ごしたものだ。

一方、知名士の多いグループも「こちらでなかなかまとまらないから……」と丁重に入会を辞退。——地方へいくほど、婦人運動の壁の厚さを思い知らされる日々、これらのことを私たちは貴重な教訓として味わった。だが産みに苦しみはつきものかと、逆に各団体の連帯のきずなは深まっていた。

戦前戦中、かつて二大婦人団体だった〈愛国婦人会、国防婦人会〉は、「お国のため聖戦勝利のため」と侵略戦争へ加担していったが、私たちはその罪を再び繰り返してはならじと、「平和のため核廃絶、軍縮をめざそう」と女たちはスクラムを組み、毎年六月十九日「子どもたちに残そう戦争のない平和な世界を」と、空襲をうけたごりよんさん（主婦）、被爆者たちは、戦争の惨禍を語りつぐ。今やマスコミも年中行事として一斉にテレビ戦争にとりあげるようになった。

各団体それぞれの独自性があり、厳密に言えば、相容れない要素もあろう。しかし、違いを探すよりお互いの接点を見つけて、手をつなごうという各団体の人たちの姿勢に「成熟した大人」をここに見る。

代表を立てて責任を明確にするが、権力志向はなく、「一人はみんなのために、みんなは一人のために」動いているさまは、見事といえる。

〈交流会〉では運営に拙速は避けるが、緊急事態発生時には、他のグループとも呼応。その一例として八二年十一月十二日、某団体が福岡県議会へ閉会直前をねらって提出した「優生保護法改「正」を推進する意見書」に対し、私たちは深夜すぐ連絡をとり合い、県議会へ駆けつけて請願書をつくり、結局「意見書」提出見送りに至らした時はドラマチックだった。

「女が働くこと生きること」をテーマに学習後、「真の実効ある男女雇用平等法を成立させるため」「男女平等と母性保障」などのアピール採択。関係行政庁に要望書提出。その後、有志団体が街頭で他のグループと情宣活動をするなど、女の生命を守るとりで——にみんなのエネルギーは、主婦も働く女も一つに燃える。

また、福岡県・福岡市の各政党へ、「政党は私たちを守りうるか」のアンケートを求めた。一、雇用における男女平等ならびに女子保護について 一、平和について 一、優生保護法について——。

これは各政党議員さんたちをあわてさせ、一石を投じたようだが、その回答結果を選挙前の資料として、各新

聞社が一斉に掲載（一九八三年十二月五日）。情報活動として他府県市からも注目され、早速、国立婦人教育会館からも、資料送付依頼があり、反響の大きさに驚いた。

その他、奥田知事に、婦人問題解決のための対話集会をはじめ、婦人行政へ〈交流会〉の連帯の強みを発揮した運動を展開している。

市長公約として一九八八年完成予定の「福岡市女性センター」を市で審議中だが、それ以前、「福岡市立婦人会館」を廃止し「女性センター」へ移行する案があると聞き、私たちはこの案の変更と、現在の会館整備拡充を訴えた経緯がある。その後、「会館存続、別に「女性センター」建設」と決定した。

行政側もこれまでの既成婦人団体重視の姿勢の移行からか、ようやく〈交流会〉も市民権を得たのか、「センター」の利用計画委員として、〈女性と職業研究会〉の富永さんと私が参加し、私たちの理念に少しでも沿った生涯学習実践のセンター実現へ向け、討議を展開中である。近日、県・市の行政、党の議長などへ提出する「婦人の地位向上のための要望書」に「センター」への意見書もまとめ、今後運営にみんなで努力しようと話し合っている。

一つのグループは動きやすくもあるが、おのずから限界もあり、他のグループと手をつなぐことで大きな力になることを、メンバーは行動を通して実感を深めている。

〈交流会〉として、これからの課題は多く、組織の拡大はどこまでか、活性化、行政との関係性など、いろいろある。予算も乏しく専従のスタッフがいるわけがなく、各団体の独自性もあり、バランスをとりながら初志を忘れず、みんなで支えあって、しなやかにしたたかに地道に、国際的視点とともに地方性を大事にしながら、共に道を拓いているつもりだが、地方へ行くほど道は険しい。

大都市の運動のうねりは「冬の時代」の到来かと危ぶまれる昨今、遅れてやってきた「地方の女たちの運動」は、その余波をも押し返すように、どげんか（どうにか）動いてもいる。「草の根」の花が匂い、真の光のさす日をめざし、交流の縁（えにし）を大切にしたいとねがっている。

ぐるうぶ紹介

交流の輪につらなる人とぐるうぶ

〈福岡あんふぁんて〉

〈あごら〉と〈あんふぁんて〉。草の根グループの名簿には大ていア行に並ぶ。どちらも素人筋には意味不明。名簿が隣あっているだけでない。月の例会も隣の部屋でひらかれるというのも月一回、この二つのグループが婦人会館の保育室での共同保育をつづけることになって久しいからだ。

親しいつきあいの発端は「女達の映画祭」を共同でひらいた一九八一年の秋から。映画祭と共同保育で結ばれたグループ同士である。

このグループの一員、岡部悠久子さんの語る言葉。「十一年前、当時の閉そく状態に風穴を求めて三人のとしごをおんぶにだっこ、一人は手をひいて出かけた先が〈福岡あんふぁんて発足〉の会だった。」と。それから十年あまり。その若い母親たちも三十代なかば。フルアルバイトで働きはじめている人、岡部さんのように開業医の夫をささえて経営の片棒をかつぐ人もいる。

でも、暮らしを自分の足もとから考えていこうとする姿勢

は変わらない。常連のひとり、奥山京子さんは、ひとつのグループでやろうとしてもむずかしいことでも、連帯してすればできる」ことに期待をかけて、この会から、交流会をささえる若手ナンバーワン。

ともかく、仕事と家庭、夫や子どもとのバランスをとりながら、忙しい時間をぬって、月一回の例会を大切に、楽しみにしている底ぬけに明るい女のグループである。

〈民主主義を守る婦人の会〉

〈民主主義を守る婦人の会〉の高木董子^{のぶ}さんからお電話をいただいて婦人会館のロビーでお会いしたのが、〈あごら九州〉との結びつきのきっかけとなった。たしか子ども劇場の青木妙伊子さんが一緒だったかと思う。青木さんもこの会の最初からの会員。

一九六八年六月、米軍のジェット戦闘機が九州大学のキャンパスに墮落した時、〈基地を考える婦人の会〉を結成して福岡で初めて女ばかりの抗議デモを行なったのが、この会の前身とうかがった。

翌年の一九六九年八月に、その名も〈民主主義を守る婦人の会〉と新たな装いで出発。着実に勉強会を重ねて二十年近い。

思い起こすのは市川房江さんの講演会。高木董子さんの平

和への熱意に動かされた市川房江さんが福岡に来られたのは最晩年。まさに八十六歳のご高齢をおしての四月であった。私たちへあごら九州へのメンバーも、あの日の市川さんのお声と言葉を忘れていない。

10フィート運動。米国の医師、カルデコット夫妻の講演「核兵器廃絶を目指して——子どもたちの未来を守るために、いま何をすべきか」等、ひとすじに平和にかける思いの深さに、そして思うだけでなく、やるという姿勢にひかれてしまう。

YWCAというのは世界の八十数か国に広がる国際組織で日本のYWCAは一九八五年に創立八十周年を迎えた伝統あるキリスト教団体。福岡YWCAは敗戦の廃墟の中一九四八年一月発会式をあげ、戦後の福岡のキリスト教文化の中枢で活動する婦人団体。一般にはYで通る。

養のほどは、いつも時代を先取りして催される、さまさまの行事にもうかがわれる。

総幹事の湯口さんの立場は、会長の鶴崎方子さんを助けて
みごとに忙しい。こどもの健やかな成長と女性の能力を生か
すためのYWCAナースリーの園長さんでもある。YWCA
の会館、ホテルの運営からバザー。私たちもたくさんの恩恵
に浴している。いま、婦人団体交流会の世話役として日本婦
人会議の末永節子さんとともに、たっぷりの量感で交流会を
ささえる。

この数年、いろんな講演会や集会で、すっかりおなじみになった主婦同盟の活動をみると、大変具体的で、生活派としての自信にうらづけられているようにみえる。

家庭を大切にし家族を大事にし、そのためには子供の人間形成の上に食事の大切さを家庭の主婦の立場で見直してみようと五年前の昭和五十七年八月「母と子で学ぶ生活展」を開催している。

「食事とは人を良くする事」と書く。家庭そろっての食事を、と訴え、家庭の一角が崩れる一因をこの辺から静かに警告しつつけている。

これからは男の子にも、食事にかぎらず生活者としての能力を身につけ、自立できる教育を、女の子には経済的自立のできる教育をと願う母親の手さぐりの活動から、地道に運動を積み上げ、組織を着実に伸ばしている。

婦人の地位の向上、生活権の擁護、生存の権利の確立を網領にかかっている。このへんは私たちも氣にいらっているところ。

五十四年末から教養講座「八十年代をひらく女性の生き方」と題し、家庭婦人の自立、婦人の社会参加、女性の老後等について着実に学習をつづけている。最近「平和に果たす女性の役割」の講座も活発。

〈福岡・女性と職業研究会〉

この会のメンバーは女子教育にかかわっている人が多い。

『月刊あこら』一〇七号が、追悼のため生前の講演を掲載し

た高木葉子さんもこの会を発足させたお一人であった。これからという時に惜しくも癌で世を去られた高木さんの遺志は、これからも引きつがれることだろう。

厳しい条件の中で女性が職場につき社会的に生きる道を求め、どうすれば女性がもっといきいきと生きることができかを話し合う会として、そのありのままの姿をこの会の名称として一九七三年に生まれ、今年は十三年目。

家事や育児だけで一生を終わりにたくない、と考えている女性ばかり。男性と肩を並べて働くには家事の負担を軽くしたいと考えて合理化・能率化をすすめてきたその過程で、それをささえる大量消費や大量生産という産業構造そのものの中に公害や環境破壊をよぶ落とし穴がひそんでいること。

その反省をさすがに鋭く受けとめて、ひとが幸せに生きる展望の中で、人間が生活者として女性だけでなく男性との協力で家庭をしっかり守ることにによって仕事と家事とのバランスを保つ方向を、一冊の本として世に送っている。福岡・女性と職業研究会編『家事・育児を分担する男たち』（現代書簡 一九八二）

まことにみごとなチームワーク。この興味ある労作をぜひお読みになっては。

〈新日本婦人の会福岡県本部〉

地域や職場で「新婦人の会」として目ざましく活動を開始してからこの会の歴史もやがて四半世紀の歩みを刻んで、その間の実践、学習・活動の蓄積は保育所の設置運動から反戦平和まで幅広い政治活動の実績を重ねて今日に及んでいる。

平塚らいてうさんをはじめとする三十三名の呼びかけで生まれた全国組織の誕生は、日本の婦人運動の史上に特筆されるものとして当時を知るものにとって感慨深いのだが、福岡県本部は中央の本部の発足の翌年に生まれた。「核戦争の危険から子どもを生命を守る」という当時のスローガンは、今日さらに深い意味で受け止められる。

この十年、「社会・職場・家庭での平等」という三つの平等運動を提起して、調査・アンケート・証言など、それぞれの生活の場でリアルに実践をみつめようと運動すすめている。たとえば「男女平等をどこなところであなたは感じますか」という風なアンケート。

しかし、男女平等も女性の地位の向上も、平和なくしてあり得ない。

「核兵器全面禁止を要求する署名運動」にはひとときわ合合いがこもる。

運動のコツは情報伝達の速さ。さすがに運動のベテランぞろいである。

〈日本婦人会議福岡県本部〉

個人加入の全国単一組織として一九六三年四月に結成された。「すべての働く人々とともに憲法の保障する民主的な権利をもちとり、世界の平和と婦人の完全な解放を目ざす」と会の目的にある。中央本部があつて県本部があつて、支部が市町村単位に、さらに班に、とみごとに組織が作られている。婦人の十年のかかりで言えば、活動は実に多岐にわたっている。

「女のからだを医療を考える」とりくみ

「母子保健法」「老人保健法」反対のとりくみ

「優生保護法」改悪に反対するとりくみ

「男女雇用機会均等法」「労基法」改悪反対、そして環境と暮らしを守る、民主的教育を守る、反核・軍縮・平和運動へのとりくみ。また基本的人権を守るため、憲法を暮らしに生かし、女性差別、部落差別をなくし、売春をなくすための運動等々。

「これらの独自の運動をすすめていく一方で、課題別に志を同じくする団体、個人によびかけて連絡組織を作り共にたたかう場を作ることに努める。この主旨で女性の人権を真に守る道は、婦人問題解決に努力している諸団体と手をつなぎ、交流をすすめる、ネットワークの輪をひろげて、これを永続させるほかはなく、この運動の核になれるよう頑張ります」と

力強く語る末永節子さん。

〈あごら九州〉に彼女のファンは多い。いま交流会の世話役。扇のカナメである。少々のことには動じない。透明感をたたえた眼。笑顔。頼もしいのは重量感だけではない。

〈婦人民主クラブ全国協議会福岡支部〉

「二度と侵略戦争に手を貸してはいけない」という思いで「婦人の解放と反戦・平和」をめざして多くの女性たちの力をよせあい、女性自らの創意工夫で様々な活動にとり組んできました。

福岡支部は一九六九年十二月ベトナム反戦、大学闘争で傷ついた若者たちの救済活動の中で生まれ、今日まで狭山、三里塚、沖縄をはじめ、優生保護法、刑法改悪反対、日韓問題、せっけん運動にと、精一杯がんばってきました。長年、地域でのせっけん運動をバネに、一九八四年合成洗剤追放全国集会を福岡で開催して以来、全国集会、県民集会等責任をもって参加してきました。この追放運動はわたしたちの命と自然を守ると同時に、アジアの人々の命と自然を守るたたかいに連帯するものです。紅い手巾（沖縄の伝統的な手ぬぐい）を鉢巻きして、まやかし沖縄返還に怒ったデモ、教育の問題ほど時代を鋭く反映させるものはないと首切られた伝習館の三教師のたたかいを支援した日々、風成（かざな）のやさしい湾をつぶ

会員のみなさん!!

〈あごら〉15周年記念全国大会に“集合”

一九七二年二月生れの〈あごら〉はこの二月で満十五歳。これからの展望を含めて、夏休みに盛大な全国大会を開くことになりました。

八月八日（土）、九日（日）、場所は東京都勤労福祉会館で行ないます。講演・討論などマジメな部分はマジメに、歌・踊り・ゲームなど楽しい部分は底ぬけに楽しく、全国各地の会員のみなさんの交流の場として「元氣の大会」にしたいと事務局一同はりきっています。

プランニングの上手な方、ぜひ準備委員になって下さい。また宿泊を希望する方はお早めに事務局までご連絡下さい。

あごら事務局 03-35411394

されてなるものかと地域のたたかいにも、小さな婦民の旗をもつてよく行きました。三里塚、北富士は遠いので、財布の中身とにらめっこですが、軍事空港建設、軍事演習に反対して長い年月不屈にたたかう、三里塚芝山連合婦人行動隊、北富士忍草母の会のお母さんたちに、わたしたちは反戦の原点として連帯支援をしています。又現在男女雇用機会均等法、母子保健法連続学習会を重ねています。

（松野尾竹子）

“均等法”で職場は変わったか

一度も声を発したことのない人も、天神の目抜き通りに立って「均等法」ではない「平等法」を」と訴え続けた私たち。

必死の運動もむなしく、「均等法」は成立しました。
「三百議席」の今、「均等法」にせよ、通ってよかった、という思いはあります。しかし、私たちの職場は変わったのか、変わらなかったのか、あれだけしつこくやった「均等法」へあごら九州へはしっこりこだわっていきましょう、ということ、五人のメンバーの近況報告とまとめをお送りします。それぞれの立場や視点の違いが読み取れるのでは、と思います。

希望の星たりえるか “均等法”



森 崎 民 子

賀状の中に「男性社員と同じにやっていますが、均等法も迷惑する部分があります」というのがあった。自分の会社では中小企業のせい、これといった変化を認められずにいた私は、あ、これこれと思い、急いで彼女に情報を求めた。

二十年近く前のこと、大卒女子は採らないで泣かされた私は、ある社に臨時給で入った。数年がんばって働けば社員への道も拓けるかもと方に一つの希望をつないだが、見込みはないとわかり三か月で退社。彼女とはその時の同僚である。電話で「しっかり書いてよ」と励まされた、以下、その話である。

均等法のせい、去年四月大卒女子社員が一人採用になった。しかしその他大勢（百人弱）の女性には相変わらず一年更新の嘱託で、ほとんどが十年以上の長期継続勤務者である。彼女もかれこれ二十年近くになるが身分はそのまま。みんな社員になりたがっている。会社はこのほど「絶対社員になりたいか」とか、「転勤・夜勤もするか」などのアンケートをとり、女子嘱託の社員化へ向けて考えざるを得ないと回答し

だが、今すぐみんなを社員にしたら経営を圧迫するからとい
い、だからといって段階的にでも具体的な方法を明示したわ
けではない。

彼女が今の部に配属されて十か月。そこには十三年になる
女性がいるが、今までは女子の正月勤務はなかったという。
ところが、ことしは正月三日から夜勤（14：00～22：00）が
回ってきた。初めてのことで部長に抗議したら、ゆくゆく社
員になるつもりなら、といわれた。夜勤等のローテーション
は男子社員並みに回ってくるが、女子への生理的配慮がなさ
れないまま労働時間だけが男並みになってしまった。会社と
しては均等法は迷惑な部分があるにせよ、都合のいいところ
のみ利用している。

彼女はまた、他社の友人にもたずねたが、その友も均等法
で給料面は改善されずに労働時間だけ延びたという感想だっ
たという。

ところで十二月二十八日の朝日「男女不問」の求人倍増の
記事は、私には形の上であれ、うれしかった。念のため母校
女子大の学生課に電話で聞くと「一般事務のみではなく営業
等の職種からも求人がかかるようになった」という返事。「だ
けど学生のほうで尻ごみする場合もあってね」

以上、聞き書きめいたものになったが、大企業は別として、
零細企業では、「均等法、関係ないって感じよ」というのが
正直な答えだった。

“均等法” はひびかず



中野 由美子

私の会社は、現在の三人の取締役が脱サラではじめて、今
年で創立八年目の若い会社である。釣、コンサート等で使わ
れる化学発光体の製造販売が事業内容で、社員三十名ほど、
ほかにパートの女性約百五十名の小さな会社である。社員は
ほとんど全員転職組で、私もその一人。入社してまる二年で
去年娘が生まれ、二人の子持ちとなってしまった。女子社員
は福岡の本社に五名、東京・大阪の各営業所に各二名、工場
は全員パートで、現在は約百五十名だが季節により変動があ
る。私は本社の研究室で技術スタッフとして働いているが、
女性の技術スタッフは私のみで、あとの四名は事務スタッフ。
女子社員で結婚しているのは私二人、もちろん子持ちも私一
人である。会社が新しいせいもあって、女子社員はほとんど
が、ここ三、四年に入社した人で、一番古い女子社員でも入社
五年目くらいである。

それぞれの部門に一応リーダーはいるのだが、自由な会社
を作るといってトップの考え方から、係長、課長といった職制

はなく、賃金も年俸制で、期末の査定により前年度の業績が考課されて翌年度の年俸が決定される。年俸決定にあたっては、男女別の賃金体系などはないが、仕事の内容、家族の生活を守るという考えから、扶養家族がいると給料がぐんとはねあがり、既婚者の多い男性のほうが女性よりかなり給料はよい。

均等法実施の影響は、社員数も少なく会社の歴史も浅いせい、ほとんど見られず、女子社員の関心も低い。ただ社風がわりと自由で、特に仕事の上で女性差別を感じることは少ない（ただし朝夕二回のお茶だしは自然と女性がすることにしている）。

新聞広告を見て私が入社する時もすでに三歳の子どもがいたが、別に問題なく、去年二人目を産んだ時も、女子社員が出産するのは会社としては初めてのことであったが、出産後の職場復帰も当然だという感じで、産前休暇も法定より二週間ほど長くとらせてもらえた（これは私の仕事の性格へ化学分析）上、立ち仕事が多いためであったが……。産後も保育所が見つからないこともあって一か月ほど育児休暇をとり、仕事に復帰した現在も週に一日育児休暇をとっている（賃金はその分カットされるが……）。

全般的にわりと自由で、明らかな女性差別を感じることは少ないが、社員全般の均等法に対する意識は低いようで、若い女子社員に結婚しても勤め続けるという意識は見られない。

また、社員はかなりめぐるまれているが、工場の従業員は男子社員三、四名を除いて全員女性のパートで、時給で働いており、受注が少ない冬場には人員カットや操業中止もあり、問題が多いようである。

「均等法」で「女性活性化」のかけ声



池田 保子

勤務先は従業員五千名の建設資材メーカー。工場が多いため女性の比率は全体で一割弱、支店では三割くらい。女性は事務補助としてのみ採用されていたが、二年前から一、二名、男性と同じ職種の女性が採用され、同時に、事務補助から転換試験を受けることも可能となる。ただし上司の推薦が必要なので実例は少ない。八六年四月就業規則改定により家族手当の「妻」が「配偶者」になる。均等法ができたのだからというかけ声で、女性の配置転換、通信講座受講の義務化、入社七年目の活性化研修が行なわれているが、ほとんど変化は感じられない。会社にとっては高齢化対策（組合員平均四十歳）が深刻なようで、やたら活性化の旗が振られている。女性を対等に扱えば、男だからというだけであぐらをかいている社員の活性化にもなるのに、と思うのだが……。

今後は、女性が働きやすい仕事のシステムづくりをめざしていきたい。OA化と従来のシステムのバランスがとれないままに動かされている女性の立場から、発言し、変えていきたいと思う。

残業も深夜業も依然として無制限



三 好 久 美 子

☆ここ三か月、一番の楽しみへのあこがれ例会にも出席できないほど仕事が忙しく、週一二回、夫に子どもを頼んで残業をはじめた私に、ある女子社員、「三好さんにはいい夫婦かもしれないけど、ご主人にとってもいい夫婦なのかしら」とときどき疑問に思います」。

☆その残業日、たまたまかかった義母よりの電話に、子どもが「お母さんはお仕事で、お父さんがごはんを作ってくれたよ」と報告。義母は夫に「あんた、それでいいの!」と不満の声。

☆上司が置いた目安箱、何についてでも良いとのことなので、毎朝の掃除当番に男子社員も組み入れるよう書くうよ、とさそつたら（私は正社員ではないので）

「そんなこと……」と目を丸くする人

「私、掃除好きだから」

「依然に比べると女子が増えて、三週間のうち一週間だけですむから別にいいわ」

などの反応。『月刊あこら』を時々買ってくれる人もいますですけれど……。

☆ボーナスを見て「私この頃ずいぶんがんばったのに、Aさんより査定が低いなんて」「Bさんは六年先輩とはいえ、こんなに差があるなんて」。AさんもBさんも女。女としか比較しない。

☆そのBさん、上司から「もう君の給料は頭打ちで、今後そんなに上げられない。プログラマーとしての能力も、管理職としての仕事範囲もすでに頂点に達しているから」と言われる。二十三人の会社で、管理職は社長一、部長二、係長二、唯一女性管理職の役職名は係長見習い。部長の下に位置し、男の係長より部下が多いのに。ちなみに彼女は三十二歳、我が社で二番目に古い社員である。

☆これは今に始まったことではないけど、無制限の残業、深夜残業、そして残業手当なし。

均等法ができてもうすぐ一年、批判的な目で見えるからか、いいことが見えてこないけれど、四月には女子も入社するとか、会社の対応を見たいと思っている。

（この『月刊あこら』、会社で売れないかなあ）

夫を「配偶者」として、

家族手当・住宅手当を受給

石 原 豊 子

私の勤務先は建設会社、従業員二千二百名、内女性は二百名弱であるが、二名が社員で、後は雇員（補助職）である。均等法を機会に女性の社員登用をとの組合の要望に対し、「雇員は職種によるもので、男性の雇員もあり（専属運転手等）均等法には抵触しない」といつてしりぞけられたままになっている。それに対する不満の声および関心は、私の周囲では見受けられない。

均等法で変わった点は、就業規則改正であり、産前産後休暇の延長と、それに住宅手当・家族手当の対象が「妻帯者」から「配偶者」となった点である。産前産後休暇に関しては、たまたま改正時期に私自身多胎妊娠をしたため、さっそく産前十週間、産後八週間休めた。また住宅手当、家族手当に関しては、私の夫の事業不振により、昨年一月一日より、夫と、その後生まれた子どもたちを扶養家族にしているため、両手当の支給を要求したところ、大阪本店の担当者は「当然支給されると思います」と言っていたのになかなか支給されない。

再度問い合わせたら、「世帯主であることが条件なので、住民票をそろえてほしい」と言われた。私の場合保育園の申請の関係で私と子どもたちの分を他市へ移動して私が世帯主となっていたためそれを提出した。それでも支給されないのもまた問い合わせると「特殊なケースなので本社社長室で検討中です」という。「女性の場合のみ住民票で世帯主かどうか確認するのは、実質的扶養者かどうか見ると思うが、先に扶養が認められ、その書類も提出している以上、ぜひ支給してほしい」と言ったら、そう伝えますとのこと。これでだめなら、お金はもちろんのことだが、それ以上に、女性に対する不当な扱いであり、均等法が尻ぬけになる、と、へあごらのメンバーの顔がちらつきながら、一戦をかまえないければならないかと覚悟したが、後日少し緊張して問い合わせたら、あっさり「さかのぼって支給します」とのことですと支給されるようになった。

支店の女性十六名中、既婚者は私を含め三名。あとの二人は私が働き続けているから自分もその気になった、と言っている。子持ちは私一人、初めてのケースである。これも続いてくれるだろうか。私の産休中に女性が五名人入れ替わり、若い人が増えた。私が最年長で、世代の差を感じる。彼女たちはまだ職業上の先のことには興味はない。均等法も関係ない、といった感じた。私も今までいろいろやってみて、女性の声を皆まとめる、というのは到底無理だと思うようになった。

結婚しても続ける、という人が私のあとに出てきたように、社員登用化作戦も、まず自分が突破口になるしかないようだ。ちようど今日支店長に呼ばれ、「事務ではなく、外廻りの営業をやってみるか。女でもやったらできるで。お前がやった後に続くもんかておるかしれんし、お前が前に言ううとった社員登用のことかてうまくいったらいいで」と言われたので、自信があるわけなし、向いているとも思えないが「やってみます」と返事した。営業職が上で、事務職が下とも思わないが、本社にアピールするには効果的だと思う。まああまり気負わずに、せっかく与えられた機会にばちばち挑戦するつもりだ。突破口となることを心に期して。

“均等法”を追って

甲 木 京 子

均等法が施行されてはや（まだ）十か月。待ち望んだらしい子ではあるが、その誕生までのさまざまトラブル、生まれた姿も何か捉えどころがなく、どういう風に成長していくのか、不安と期待の入り混じった心境で見守ってきた。

今後どの程度の実効性を備えていくか、法的拘束力を持たないだけに、平等を求める女性たちの情熱次第、などと一様にマスコミに書きたてられ、へ出来たものは仕方がない?!

これからが問題よ!」とつぶやき合った。その後大きく報道された裁判にも、あちこちで繰り広げられている知られざる女たちの小さな戦いにも、その勇気と不屈の精神に大きな拍手を送りたい。が今、それら全部を飲み込んでしまうのではないかと思えるほどの、大きな雇用形態の変化のうねりが、私たちを、均等法を、巻き込んでいくこうとしている。

急激な円高、産業の空洞化、雇用不安、労働組合に押し寄せる波、変革を迫られる産業構造……。いくら雇用の場での平等を叫ぼうと、新しい法律が出来ようと、あらゆる奇策を弄しても変わろうとしない企業が、経済的要因で欲しい労働力が変われば、それはすさまじい早さで対応していく。均等法とそれに伴う労働基準法の改正が、この大変革の波の中で、企業の生き残り対策にうまく組み込まれていきそうなのである。

すでに女性に対する残業や深夜業の制限が緩和され、一日二時間の残業規制も取り払われた。それだけでも大変な思いをしている人たちが多いと聞くのに、近々労働時間短縮と抱き合わせで、その弾力化が本格的に考えられているという。

転勤を踏み絵にした、総合職と一般事務職の選別化に泣かされ、今度はまた変形労働時間制で激しい選別を迫られるのか。自由に転勤や残業が出来、人一倍の能力と意欲を持った女性しか、男性と平等に扱わないというのか。

どの職場でも女子社員のパート化が著しい。パートや派遣

社員でできない部分だけ、少数正鋭の正社員にやらす。二〇〇〇年には労働者の1-3（現在1-6）がパートや派遣社員になるだろうといわれている。

こういう状況の中、ささいで繁雑で、容易に弾力化できない日常を抱えた女が働き続けるしんどさ、女であるということだけで迫られる数々の苦しい決断の不合理性、何もかも密室で知らぬ間に決まってしまう不気味さ……。へやり方が汚いじゃないの！〜と叫んでも、「それどころじゃない」と聴く耳持たず。より有利な資金の運用、より安い労働力や税金を求めている海外進出、大企業ばかりでなく地方の小さな会社、果ては個人までもがマネーゲームに明け暮れる。

常に安く流動的な労働力を求める企業側の論理で、職業生活と家庭生活の調和を理念とする均等法は、どうしても相容れないものだろうか。法的に強制力を持たなかったことはやはり致命的であったのか……。確実に急速に高齢化しつつある社会、地球規模で進む環境汚染、より長くより広い視点から雇用の問題を見直していくことが、今こそ必要であるのに……。

修身雇用制が崩れるのも、パートや派遣社員が増えるのも、コンピュータに仕事を奪われるのも、それ自体は決して悪いことではない、人それぞれの体力や年齢に応じた多様な働き方があっていい、働かない人がいてもいい。自分で選んだように、実は選ばされている息苦しさ、うっとうしい。

私のようにパートで働く者も、専業主婦（主夫）と呼ばれる人たちも、一見均等法とは関係ないように思えるが、職場も家庭も同じ人間が繰り広げる人生の一コマ。しっかりとつながっていることをもう一度確認しながら、これから均等法とどうつきあうか、結論など出るはずもないが、無い知恵を絞りますしょうか。

いま、均等法は目が離せない。

「自立の心理学」教室にどうぞ！

こんにちは、可能性教室「自立の心理学」です。

『あごろ』一〇八号の「自立のおしゃべりに風穴をあける」は、いかがでしたか？ 細く長く続けることで、参加メンバーに、じわじわ効く薬みたいに何かが浸透していつているようです。

テーマは「何にする、次回どうしようか」のまま、ウロウロしつつ、今は「男と女の考え方や発想のちがいを種に、ともすれば日常の話に戻ってしまいます。

参考図書として、セックス・ブレイン（工作舎）があげられています。ぜひ、一度参加してみませんか。次回は三月六日（金）夜七時からです。

「わたしの仕事」 今スーパ―に何が起こっているか 田村尅子さんにきく

昨秋、婦人問題推進本部主催のシンポジウムが山口市でひらかれ、中国・四国・九州・沖縄までの広い地域の各県からたくさんの人が集まった。テーマは「婦人の地位向上の着実な実現をめざす」というものだった。

パネラーの経済学の先生から、「日本のスーパ―方式をひろげよう。能力ある女性を責任あるポストに。やりやすいところから実現を目ざせば、そこに女性が定着し、必ず新しい波が……」

この討議に参加した私は、へあごろ九州の田村さんにぜひとも実情をうかがいたくなった。それで……(福田)

Q 最近、女性管理職の出現等、スーパ―は女性の職場として注目されているようですが……。資格試験が取り入れられただんですって。

A 私の会社でも、均等法ができて女性係長が増えたり、わずかだがその方向にあるようです。けれども、女性客が大部分を占める営業でありながら、売り上げに直結する売場の担当チーフや、仕入れ担当(バイヤー)に女性が非常に少ない。それは営業の数値管理をまかせることへの不安と、社員は一

応、週休二日であるが、営業日数(月一回店休)、長時間営業(午前十時〜午後九時)の中での勤務に対する懸念、転勤等が問題だと思っています。

教育の段階でも、女性にあるのは接客の教育だけで、営業面での教育はほとんどありません。資格試験は私の会社では男女ともなく、昇格は上司の評価のみです。

Q スーパ―の組織って、どんなふうになっているんですか。
A 組織は本部と各店舗で成り立ち、総合的な企画、事務業務、仕入れは本部で行われます。営業はグロスリ、生鮮食品を中心に十部門余りに分かれて、縦割りの組織になっています。店舗での構成は

日用品(課長)	副店長30代	↓パート3名
デイリー食品(係長)	20代	↓パート2名
保存食品・菓子(係長)	20代	↓パート4名
精肉(課長)	30代↓サブチーフ(男)	↓パート4名
鮮魚(係長)	20代↓サブチーフ(男)	↓パート4名
野菜・果物(係長)	20代↓サブチーフ(男)	↓パート4名
惣菜(女性嘱託)	40代	↓パート6名
チェックアウト(女性係長)	40代	↓パート16名
事務(女性係長)	30代	↓代 行1名
商品管理(係長)	30代	↓店舗の規模に
移動車(課長)	30代	よりパートの
テナント	4店	数が変わる

Q 仕入れはどのようにされているのですか。

A 担当は、バイヤーと呼んで、各部門に五、六人。店舗ごとに地域性があるため、要望は出しますが、くい違いも多く、細かい配慮がむずかしい面もあります。女性の意見が反映されたらと思います。現在女性のバイヤーは一人だけです。バイヤーには店舗配属五年―十年を経ている人が多く、各店の店長はほとんどバイヤー経験者です。

Q 評価は何が規準となるのですか。

A 販売なので、売上げ、利益で判断される場合が多い。それから仕事の処理能力、協調性、チェックアウトであれば、接客技術が重要です。

Q 最近では定着率が良いということですが。

A 十年前と比べると良くなりました。女性社員の場合だと、三十五歳だった定年が、組合の闘争の項目の一つだったとして徐々に伸びて、数年前に男性と同じ五十五歳になりましたし、結婚、出産でやめる人も相変わらず多いけれども、三十代、四十代の勤続年数が十年を越える人が増えています。全体的な女性の社会進出の伸びとともに、子どもがまだ小さい若い主婦が、再就職の場として、身近なローカルスーパーにパートとして希望する人も増えました。社内の十年勤続表彰にパートで働く人々も増えているのが社内報等でわかります。三年前にパートも定時社員と呼んで、組合加入ができるようになったので昇給や有給休暇等、少しずつですが、労働条件も向上しています。

Q 勤務時間、賃金はどうなっていますか。

A 社員は八時間勤務で固定給＋時間外手当、パートは四時間から六時間勤務、賃金は、福岡県の最低賃金四百六十五円から、職種と勤務する時間帯で異なり、六百円くらいまで細かく分かれています。その他は歳末の特別手当で一万円と、一時金として夏と冬で一万五千円程度(勤続年数で多少違う)があります。

Q スーパーは将来、女の職場となるでしょうか。

A 均等法の施行を機に、女性客を相手とするスーパーが、大手から徐々に女性を重要ポストに登用する傾向をみせています。私の勤務する会社は福岡を中心に五十二の店舗数を持つ中堅の地場スーパーで、昨年の均等法施行時に、一人の女性店長と数名の勤続年数が十年を越えるベテランの女性が係長に昇格しました。けれども営業面への配置が少ないため、大きな変化とは感じられません。元来、女性の分野とも言える接客に対しても、経験を生かした、キメ細かさは、小売業にとって、より重要なことです。一度やめた人を再雇用する制度を取り入れようとする動きもありますし、結婚、出産を乗り越えて、意欲を持った女性も増えているし、もはや、女性には責任感にとぼしいというような固定観念はなくなってきたと思います。業界の競争の激しさは年ごとに増すばかりで、女性の視点やパワーを生かすチャンスとも言えます。今後を考える上で、発想の転換は必要です。流通業界が女性の数の多さだけでなく、全体の企業の中で名実共に女の職場と言える時が来るかもしれません。

地域の新聞に見る 均等法・その後

一九八六年四月、十二月
西日本新聞

小・中学校女性管理職増加(4/1)

福岡市の女性中学校長、二人目誕生。

県内では、新たに校長一人、教頭六人と計四十六人。

福岡県教委が教師用指導集(4/15)

男女平等教育推進のために、①男女の役割分担の見直し②家庭教育の男女共修③女生徒の進路指導など県内各小・中学校に配布。

来春の大卒女子採用企業増加(4/18)

日本リクルートセンターが全国の企業約千二百社を対象にした調査では、大卒女子の採用増加を予定している企業が一割以上。うち文科系は、全体の十六・九%増、理科系は一〇%増。男子学生は、文系で三九・二%、理系で三三・三%増の見込み。

昇進・昇給変化なし(6/26)

日本リクルートセンターが、首都圏で働く女性千人にアンケート調査した結果、昇進・昇給など、均等法の恩恵にあずかった女性はちよっぴり。

転職できる女子求む(7/5)

福岡市に本社のある総合商社・ヤマエ久野は、来春、四年生大卒女子から、転職がある総合職と転職のない一般職に分けて募集。

放送業界の採用は、まだまだ(7/16)

職員の三、四割が女性、という米国の放送局と比較して、日本は、在京民放五局の合計で、八%。NHKはわずか四%。九州で初めて婦人消防士(8/5)

北九州市は、六二年度から、女性にも、消防士の門戸を開放。

現在、女性消防士は、東京三百六十人、横浜四十人。川崎市、札幌市でも若干名。

女性の昇進、課長まで(8/7)

労務行政研究所が、均等法直前に、まとめた企業の対応状況によると、採用・配置・昇進など、男女差別をなくす制度上の見直し、検討を加えた企業は、全体の半分にすぎないことがわかった。

女子は、門戸開放進む(8/20)

リクルートリサーチの調査では、今年は、円高不況で大卒男子の求人総数は、前年比、一一・七%減、女子は、短大も含め、一二・四%の伸び。

福岡県内の働く主婦六四九人に

アンケート(9/3)

均等法を知っているのは六〇%。職場環境、待遇改善は「あまり変わらない」が九五%、地位は「あまり変わらない」が七三%。

あいら読書室

舞鶴に風ふくらむ

福岡市立婦人会館
創立十周年記念誌

舞鶴とは、福岡市中央区舞鶴。海に臨むこの地に婦人会館が設けられて十年、その会館を利用し、育った百余のグループと個人の軌跡が、三百二十八ページの、ずっしりと思ひ記録集にまとめられた。

第一部は、「学び、創る女性たち」――拓き、育てた個人の思いと、舞鶴に集ったグループの消息、第二部は「婦人会館の歩み」――開館に至る黎明期の歩みから開館後の諸活動まで克明に記され、第三部「これからの婦人会館」に、それらをふまえた今後の展望が語られている。戦後四十年間（一九四五―八五）の婦人関

係年表、婦人開館利用団体、グループ一覧の、二つの貴重な付表も加えられ、この会館で育ち育て合った人びとと、会館関係者の真しな姿勢が、そくそくと伝わる。

（A5判、非売品、好評で、すでに在庫はないとのこと。問い合わせ先〓福岡市中央区舞鶴二一五―一福岡市立婦人会館）

男も読もう

女性学入門

執筆 篠崎 正美

「現代会社でのモノと時間のゆとり、人権思想の発展段階で、女たちの意識、意識下、そして行動は大流動を始めた。「空気」や「装飾品」、単なる「働き手」でない本当の自分を求めて。女であると同時に人間として価値ある自分とはどう

いう自分なのかを、「自ら」問い始めたのである。家庭、地域、職場など社会の各所で女が受け入れてきた役割の見直し、役割を生みだした社会そのものの見直しにとりかかったのである。今、女性学とは、そんな女性たちの活動の全体である。」（連載第一回からの引用）。

西日本新聞に連載（週一回、八七年一月―四日現在、三五回）中の本稿の主な内容を、順を追って紹介しよう。

①「髪形は変わる」――時代と共に変わる、女性の髪形について。

②「主婦と移動」――働く主婦が、仕事を続けるために、遠距離通勤をしたり、夫と別居すること。

③「共同の原形」――カナダ極北の厳しい自然環境におかれた、ヘアー・インディアン社会での、男女の共同、極小化された性別役割分担。

④「性差と分業」―生物学的差の社会的利用、生計活動上の性別分業、男は外女は内」のパターン化とその問題点。

⑤「男らしき女らしき」―子どもたちの心理上の、性別役割の区別の形成、「男の子らしい」や「女の子らしい」ではなく、「その子らしい」保育について、また、「女らしき」の内容について。

⑥「女の声」―不要な女らしさを捨てることによって変わってきた「女の声」と、失われつつある女性の優美さ。

⑦「男の役目、女の役目」―夫は「生計維持」、妻は「家事労働」という、家庭における男女の分業パターンについて。

⑧母たちの時代―前産業化社会から産業化への歴史の中で、「夫が稼ぎ、妻が家庭を守る」というパターンは現れたが、その中で個々の男女の社会的位座によって、「分業パターン」は変わらずに、男女の役割分業は、さまざまな現象形態がとられた。その意味を考えるため、母たち、祖母たちの生活史を、役割分業パ

ターンの受けとめ方、遂行の仕方に照らして取り出してみる。

専業主婦としての生き方は、近代化中期の時代に、良妻賢母主義の公教育として展開され、それは対象を中流女性に照準し、高等女学校の間で行われた。貧しい農村に生まれ、そうした教育を受けることなく満州に渡り、裕福なサラリーマンの妻となって思いのままの暮らしをし、やがて夫が病に倒れるとともに、「莫連女」におちいった祖母。そういう母親をみながら、他方で、高女や女専の教育を受けた、専業の奥様、お嬢様たちを見、父親の病氣以来、家系の担い手として働きに働いた人でありながら、良妻賢母である専業主婦に強く同一化していった母などの例を挙げる。

⑨「女の城」―国立婦人教育会館での「女性学講座」に参加して。

⑩「人権と性」―性」の問題は、女性にとって、性規範の二重性の中で、抑圧的である。無知と無経験、「欲求の希

少性」の型にはめこまれる。そして、男の「性」をめぐる関係には、さまざまなアンバランス（搾取と喪失、過剰性と希少性、能動性と受動性、支配と従属、等々の）が存在している。

ここでは、売買春、夫婦間の性の問題などがとりあげられる。

社会学、心理学その他、女性学に関係のありそうな学問とは一切無縁の私ですが、そんな私でも、身近なことから、具体的な事実、筆者の経験などから筆を起し、議論を深めて行くという手法は、とても理解しやすく、説得力があり、それでいながら、奥が深く、読みごたえがありました。

女性学が、意外にも、非常に身近なものであると感じさせ、同時に、日常の事々について、深く考えさせてくれる「入門」書です。

筆者は聖マリア学院短大、社会学の教授。
(A・O)

シニア・ウーマンズハウス報告

その2

●駒尺喜美さんのお手紙から

シニア・ウーマンズハウスに関心をおよせ下さり、ありがとうございます。

今のところ呼びかけ文を少し出したただけで、土地探しに集中しています。なかなか思わしいのがないのです。が、とにかく土地を決め、設計案をつくり、価格を出すという具体的作業を進めないことには、皆さんも雲をつかむようだと思います。その具体案が出来次第お送りします。そのでよろしく願います。申し込みは各世代(三十代から八十代)わたってますし、シングル・親子・夫婦子ども、などバラエティーにとんでますのでほっとしています。

●シニア・ハウスの場所 大阪府の茨木あたり。駅に近い場所。

●規模 建築面積五十坪内外、十戸内外五階建てぐらい。

足場がよくて、あまりチャチなもので

なく、ユニークな建物にしたいのです。

土地探し、建設と、二年はかかります。一九八九年四月入居予定なので、できるだけ早くプラン決定したいと思います。

私の現在の住居、56番館も、ささやかながら女たちの集まりの場となってきましたが、今度はもう少し拡充したウーマンズハウスをつくりたいと思います。私はそれに第三の青春をかけたいと思っております。ただ、青春といっても「老春」というのが現実ですので、シニアハウス+ウーマンズハウスといった形で建てたいのです。

①シニアハウス

これは老人ホームでなく、手すり、段差などを配慮した、老人の暮らしやすいマンションづくりです。協同住宅方式で建てますので、入居希望者が集まったら、それぞれの住居部分を一戸ずつ設計して建てます。

②ウーマンズハウス

女たちの集まり場、研究所などをつくりたい。こんな日のために貯金をためておいたとか、思いきって独立しようなどとお考えの方はいらっしやいませんか。医院、たべものや、ブティックなど歓迎します。

(多分、①の住居部分を上層にとり、②を一階にとることになるでしょう。いわゆる店舗つきマンションの形です)

概略は以上のとおりですが、あとは入居希望者の資金と知恵によって、大きくなったり小さくなったり、変形したりします。老人や女の立場に立って考えることのできる人なら、老若男女を問いません。普通のマンションを買うのと同じだと思ってお下さい。協同方式で建てますから、少しは割安になると思います。

●申し込み、問い合わせ先 東京都新宿区矢来五六、駒尺(切手、宛名つきの封筒を同封願います。)

●シニアハウスの参考書 高橋英与

『街の中の小さな共同体』中央法規出版

「軍用地二十年強制使用」のこと、そして女たちの集いのこと

島袋由記〈一坪反戦地主会幹事・80年沖縄女の会〉

去る一月九日、沖縄県庁構内では反戦地主会、一坪反戦地主会の会員たちを先頭に、軍用地の二十年強制使用に断固反対するハンガーストライキが開始されました。

百二十時間の断食に突入した五名に加え、この五日間に延べ六百名もの人びとが一日交代などでハンストに参加したのですが、二日目にあたる十一日の日曜の午後、一坪地主の女たちのよびかけで「井戸端会議的に反戦・反基地を語り合う女たちの集い」がもたれました。と言ってもこの長たらしい集会名称は私が勝手に名づけたもので、その名のとおり、名称やスローガンなど全くなく、ザックバランな話し合いとなりました。

きょうは一坪反戦運動と、この女たちの集いについてお話したいと思います。

〈一坪反戦地主会と軍用地二十年強制使用〉

十五年前の「復帰」の際三百名いた反戦地主も現在は百名をきりました。反戦地主たちのためゆまぬガンバリも、国家機関を総動員したアノ手コノ手のしつこい契約強要の攻めのはざまで、ついに志に反した契約に応じざるをえなかったことを考えると、無念なりません。この「無念」の思いから「何とかせねば」と生まれたのが一坪反戦運動でした。

ここで軍用地料の変化をたどってみましょう。復帰後の一九七二年はその直前の六・五倍へと一挙に引き上げ

られ、一九八五年には一四・三倍にもなっています。また一九八六年では前年比九%の値上げとなりました。公務員でさえやっと二、三%のベースアップに甘んじなければならぬ昨今、軍用地料の破格の引き上げがいかに露骨な政治的表現が一目瞭然です。このことを踏まえたうえで、一坪反戦地主会代表である新崎盛輝氏（沖縄大学学長）はこう語っています。「地縁・血縁・札束攻勢に追い込まれながらも、百名の契約拒否地主が残ったことは、まさに驚異的な出来事として評価されねばならない。」

一坪反戦地主会の出現で、契約拒否地主は、百名から

一挙に二千名へとふくれ上がりました。蟻の大群です。厖大な人力・時間・金を費やしてやっとここまできた、とうす笑いをうかべていたであろう国・防衛施設局に、驚きと狼狽を与えたことは想像にたくありません。

「軍用地の二十年強制使用」は、新たな展開を拓いた一坪運動の、その実効性を前にした当局が、恐れと焦りの中で、突如として打ち出した新たな攻撃です。復帰前、米軍でさえ島ぐるみ反対運動の嵐の中で、「十六年強制使用」を実現しきれなかったことを思いかえせば、この「二十年……」のもくろみの罪深さは、沖繩の明日を奪うことを意味します。

今年の五月十四日で現行の契約は期限切れとなります。当局はこの日までに「二十年……」のすべての法的手続きを完了せんとやっきになっています。裁決機関である県収用委員会は、公正中立とは名ばかり、公平のポーズすらとらず、「二十年……」裁決を前提に、審理を進めてきました。しかしこの審理も中途のまゝ、去る十二月の十一回目をもって事実上打ち切れられ、その際必要もないのに私服刑事らが会場に乱入し、逮捕者・ケガ人がでるという事態を招きました。折しも開会中であつた県議会では、「私服刑事の乱入」をめぐる紛糾し、議会は数日空転しました。

私たちはここで、「一坪たりとも軍事基地には使わせない」という言葉を誇りに、二十年強制使用に反対、公開審理の継続を要求して、冒頭に述べたハンスストに突入したのです。

〈反戦・反基地を考える女たちのつどい〉

一坪反戦地主会にはたのもしい女たちがたくさんいます。狭い沖繩のこと、互いにかれこれ十年來の顔みしりだったりするのですが、それぞれ別の運動体で活動してきていることもあり、一坪運動の中でもあらためて語り合う機会も意外となかったのです。公開審理打ち切りに対する怒りが続き、「何とか先を考えてゆこう、まずは女たちが集まってみよう」ということになり、そのうちの一人、宮城せつ子さんが五日間ハンススト貫徹メンバーに加わっていることもあって、ハンスストテント横での青空集会が実現することとなりました。

芝生にムシロを敷き、くるま座に座った三十名の女たちからは、日頃胸にしているさまざまな思いが語られました。

「集会やデモに参加し、こぶしをかざす。闘いといえはこの三つしかない、そんな運動はあまりに貧しい。もっといろいろな表現ができる豊かな運動をつくってゆき

たい」

「男の人たちは家庭のことや子どものことをほとんど女にまかせて活動に出る。その上に成り立つ運動に、女性と共に参加できる余地など準備されていない」

「女も男も、生活まるがかえでやってゆくのがたいせつと思う」

「息子の小学校では、数名を除いてみんな丸刈り。息子もすでに次期担任の教師から、必ず丸刈りにさせる、との予告をうけている。冲教組は、日の丸・君が代に強く反対しているのに、一方では何故丸刈り・制服を押しつけるのか。人間を都合のいいように管理統制してゆこうというもくろみは全く同じであるのに……」

具志八重さん。彼女はひめゆり部隊とずっと行動を共にしていた従軍看護婦で、ただ一人の生き残りでもありません。「私は被害者のつもりで冲縄戦を考えていた。でもそれだけでなく、アジアの人々に対しては加害者の面をもっていたことに気づきました。朝鮮から連れてこられ、慰安婦にさせられていた女性たちとも一緒のときがありました。今になってやっと彼女たちの気持ち可以理解できることもあります。」具志さんのこの言葉はとても印象的でした。

三時間半にもわたる意見交換は、もちろん結論めいた

ものはないものの、地域も異なり職業も雑多、それぞれとirkんでいる具体的テーマも別々である私たちが、それはそのままを続けながら、性差別を許さない女の視点はたいせつなものとして、共にもちつづけてゆこうと確認し合いました。いざという時に即スクラムが組める、そんな女同士の連帯を予感させる集いでした。

一坪運動も、私たち女が生き生きとした闘いをするこ
とで、一層強く豊かになります。

『老人を介護して』が本になります

昨年から一年間にわたり連載、非常に好評でした石川房子さんの『老人を介護して』を小冊子にまとめて編集中です。老人を介護している方、老いに向かう方など、ぜひ一読ください。友人、知人へのプレゼントにもどうぞ。

(あこら事務局)

〔連載〕⑤（最終回）

働き続けた四十年（講演録）

辻 和 子

私が大学を出ていないというコンプレックスは、やっぱり仕事をつづけてゆく中で克服できたように思います。志賀島のカンカン部隊のおぼちゃんに二度出会って十年目にも覚えていてくれた素晴らしい記憶力に感動しました。このような記憶力・行動力・経済力をもった魚の行商のおぼさんたちと知り合う中で、自分の弱さを克服してこられた部分もあります。

しかし、それでも気が滅入る時、最後に今からご紹介いたします富本一枝さんのお手紙を読み返します。

これは私が、自分が大学を出ていないことにコンプレックスを感じて、だいぶ以前のことですが昭和三十二年頃、自分のような人間には芸術が理解できるのだろうか、という様なことをめめを書いて出した私の手紙に対しての返事の一部です。

「……なぜ、辻さんはこんなに自分を卑下し過小評価しなければ気がすまないのだろうかと考えてみました、何と
いう淋しいことですか、その癖は。自分のような人間という、あなたのこともなげな言い方を私は大変よくないと言
いたいです。ほんとうにそう言い切っていないのですか。」

生きるしるしは、自分というかけがえのない、生きた個体を、とことん大事に、存分に、強烈に育てていることで
す。不断にです。育てる方法、目的、手段はむしろ第二のことです。

生活の場があることは何とないがたいことでしょう。もし人間が住むところなく、することもなく働く場所も
ないとしたら（ような）人間がそれこそあっても不思議ではない。『写された幕末』を昨夜みました。これは石黒敬
七さんのものですが、文久、慶応時代の洋娼ランシャメンの顔をしっかりと、あかず眺めたものです。食っているほど、し
っかりみつめたものです。



何という生き生きとした大胆な野性的なあざやかな、そして強烈で逞ましい顔つきでしょう。生活が彼女たちを封建的なものからさっさと脱皮させた、その驚きを強く感じさせられました。文久年間に海外で商売していた彼女たちにすごいものを感じ圧倒されたといったら、恐らくお偉方の婦人先生がたに、はり飛ばされ、いやな目顔をむけられるでしょう。

これは、私が、生活が人を変革させたことに思い及ばせたということなのです。

勇気とは、オデルコトナキ力とみこうみすべからず、相手をけとばしてまで突き進むことをしないまでも、そまつにしないことで、がむしやたらるべし、お互い知りあい、心に通うものを持ったことを私は大そう幸せに思っているのです。大切にしましょう。むき出しでつきあって下さい……以下略

私は、仕事のことや人間関係のわずらわしきで心が挫けそうになる時、いつもこの手紙を読んでいます。

この四十年間、働きつづけた中で、知りあった沢山の方々との交流が私の大切な大切な財産です、そのことを心の支えにして死ぬまで元気で働こうと思っています。今日は私のつたない体験談をおききくださって本当に有難うございました。

私たちから見た辻和子さん

博多のオナゴは血が熱い

田辺 聖子

辻サンは飲んで「上海バンスキング」を語り、「エレファント・マン」を語り、忙しい人なのに、いろんなものを見て、見たらしゃべらずにいられない、自分がしゃべるだけでなく、こっちの話もじっくり聞いてくれて、すぐ夜が更けてしまう。しゃべり足りずに辻サンの家までいって飲み明かしていた。

辻サンはハイカラ趣味のハイミスなのに、ちゃんとご両親のお位牌を祀ったお仏壇も持っていて、これが泣かせる。

これこそ、柳田国男大人のいう「妹の力」である。その家系を守る靈しき力を秘めた大姫、というのが、自活ハイミスには多い。

——世間が「翔んでる女」などと蔑視するキャリアウーマンのほんものは、こういう、底力のある女の人の人なのである。

(『週刊文春』より)

辻和子さんへ辻和子より

吉行 和子

RKB毎日のプロデューサーでもありディレクターでもある、辻和子さんと知り合ったのは二年前のことだ。『小間使の日記』が九州で公演することになり、福岡での公演に力をかして下さった。力をかす、なんておさなりなものではなく、さんさんな目に合せてしまった。幸い劇場は大入りで満員で立ち見も出たりして、気分としては喜び合ったのだが、その前後は大変だった。それにもかかわらず、今回も、『恋のメモランダム』で、またまたさんさんお世話になってしまった。私が福岡で公演する度に、辻さんは、切符売りの少女に扮して、雨の日も風の日も外に立ってではなくてはならない状態になってしまふ。オジサン切符買って、と誰かれかまわず言

わなくてはならない役を押しつけられて、この大プロデューサーはとまどいながら、涙が出るほど一生懸命がんばって下さるのだ。

辻さんの実績で、誰かれかまわず、ということとはしなくても多勢の方たちが来ては下さるが、やはり一人一人に声をかけなくてはならないから、その労力は大変だ。

何故こんな災難が突然ふりかかって来たのかといえば、名前のせいだ。

実は私の本名は辻和子という。吉行も本名だが、母が、辻さんという人と再婚したので、私も戸籍が変わった。四年間ばかり結婚して別の苗字になっていたこともあるが、また戻ってしまった。普段は吉行で通しているが、パスポートなどには、辻和子、と書いてある。長い付き合いをしている友人が、パスポートを見て、見てはいけないものを見てしまったように慌てて、誰にも言わないから、と言ったので一瞬何だろうと訝ったが、私が結婚しているのを隠していたのだと思ったそうだ。違うのこれ、母が再婚して、と私が言ってもわかってる、大丈夫だから、とまだ慌てているので困ってしまったことがあった。

辻さんにはピーコが間に入ってくれて、公演のことをお願いした。私の本名が辻和子だと言うと、「あらア」と驚き、その一瞬から切符売りの少女の役を振り当てられてしまふハメになった。

自分の考えとの折り合いをみつけないがら……だから当然ゆれ動きながらというところですよ。

(7P) 「自分の……時代なんだよね」のところ、時代って言ってしまうと、もう評論みたいになってしまう。しまさんが具体的に一人一人の問題にしようとしている様子は、よくうかがえましたが。

(8-9P) 「自分がない」も抽象的で、はやりなのか時々きくけど、自分の何がないのかを入れないと、どんな気持ちのことをいっているのかわからないし、言葉上の議論のように受け取れました。

(10P) 「人間専科」は具体的にどういうとらえ方がよくわかりませんでした。「ふくらませないで……」「共感から……」は私たちの例会での話し合いでもよく落ち入る現象で、本当はちがうのに「そうね」でつないでしまったり、気をつけてみようと思いました。

(11P) 「家事は負担」これだけでもその気持ちの奥を検証していくと五、六ページかかりそう。今度そのあたりを深

く深くやってみてもおもしろいのは。何度も読みなおしながらここまで書いてみると(合間をみつけてチョコチョコ書き加えていったので文体も内容もバラバラで失礼)話題が広範囲だから読むほうが頭の切り替えが追いつかないでそう感じたのかも知れませんが、理論ばかり先行している感じを受けました。

(傷ついたからこそ) 立中さんの人柄が感じとられます。ちがいますか。こういうのを読むと、世の中すてたもんじゃないなと思います。と同時に近頃なまけている私を反省させられます。

(老人を介護して) この連載はとても気に入っています。具体的に現実の体験に基づき、しかも「老人をかかえる家庭はこんなもの」にとどまらず社会的な問題としてきちっと提唱し、しかも石川さんの考え方も主張しているから。最後の7行は特に、言い得ていると思いました。(あこら読書室) 「愛は光なり力なり」を読みたいと思いました。

(自らを装う) 札幌が十周年のときこ

のテーマを取り上げたのを知り、すこし驚いたのを覚えています。実は多少自分でも服装や化粧について気になりながら、ちゃんと考えたことなかったからです。久須美さんは「月刊」にもよく登場するけれど、いつも流れるような、楽しい文章で、書くことのりがてな私は感心するばかりです。おもしろかった。

(とびつくす) 月刊の月刊たるゆえんのようなページ。取材が大変でしょうね、でもこれからも続けてほしいです。

(委員会名簿) 福岡の三人は知っていましたが、やはり全国的にこういう人選になるのですね。大学の先生に働く女の実情が通じるのでしょうか。大学内は制度こそ差別が少ないものの、実態はひどい男女差別の世界だとよく聞きますけど。「ナイロビ号」の原稿集めるとき、地元新聞とかミニコミ、広報機関紙などには、さっと書いて出しているのに「あこら」となると、書きにくい、書くのがむずかしい、という人が何人もいました。またせつかく何枚も書いたのに、読み返

して、とても『あごら』に載せられるような文章じゃないと、自分でボツにしてみました人も。格調高い文章と、おしゃべりの域を出ないような文章の混在するものであったらと思います。そう思って、私は書くの大嫌いだけれど、時々投稿してるんです。でも、前回の原稿、たった

あれだけでも仕事を一日休まないと書けないんですよ、私。もっとも、具体的な対策がないと事務局も困るでしょう。今回各シリーズの担当を決めて原稿を集めるのもうまくいくといいですね。一つの方法だと思っています。(福岡 三好久美子)

「折にふれて」

◆私は、大阪創元社より「女のための政治入門書」(仮称)を出す予定で、色々と資料を集めているところです。内容は1女性関連法案の国会議事録、2行動の手引き(陳情・請願・裁判等)3資料(政党・マスコミ)を考えています。『あごら』のテーマとして「婚外子差別」をぜひとも取り上げて下さい。私は未婚の母

への寡婦控除適用と非嫡出子相続差別の廃止を、糸久八重子参議院議員を介して国会に請願するつもりです。男を敵に回すのではなく、男同士、女同士の子育ても含む多様な家族を認めていきたいのです。署名等協力していただけるのでしたらお知らせ下さい。(安東尚美)

◆編集教室では落第生でしたが、今生協の機関紙の編集の手伝いをしております。もう一度編集教室を受けると、きっとよく理解できるな、と思っております。私の母の暮らしをどうするかで、トラブルが続いたりいたしまして、アルバイトもやめており、(あごら)の仲間作りも進んでおりません。自分が老いることも含めて、母の暮らしを見ていきたいと思っておりますが、こんな時女性に経済力がないということ、とても悔しい思いをしております。(藤重洋子)

◆今年の幕開けは、私にとって忘れられないものとなりそうです。日本という国に住む人間としてこれまでにないほどの絶望感にかられたからです。私を日本に

とどまらせているものは、友人と愛すべき人々がいるからにすぎないことを悟りました。同時に杉並地域で国家秘密法反対運動と税制改革(案)反対署名運動を始めました。ビラや署名用紙を同封しましたのでご協力をお願いします。

これまでの女の運動はタコツボ、単発、単独方式でした。しかし私たちを抑圧する側は、あちゆる方面から組織的構造的にしめつけ体制を強化していたのです。これからの運動は、より総合的にトータルに社会の動きを見ぬき、運動していくことと、相互の運動体の連絡の取り合い、人脈化、ネットワーク化が要請されると思います。また日常の運動を、楽しくゆとりがあり、自己発見があり、コミュニケーションがありというような、今日の人々に対応したものにしてゆく技術も平行して磨いてゆく必要もあります。私たちの運動の限界を破っていく必要を感じています。

ますますのご活躍をお祈り申し上げます。(利根川紀美子)

「入ってみたい」

◆私は岡山で会社員をしている三十五歳の女性です。女性情報誌『あごろ』の記事を新聞で見ました。(山陰新聞「ミニコミの女たち」のシリーズより)その時切り抜きを作ってスクラップしていましたが、やはり是非一度読んでみたいと痛切に思ってお手紙をさし上げました。

私は二十代後半で離婚し、仕事に就いて以来ずっと同じ会社におりますが、女が独身のままでいるということについて社会(特に会社において痛切に感じるのですが)における女性、自分の立場をどう認識し、またどの方向へもって行ったらよいのか、思いがからまって、壁にぶつかった状態です。

(岡山市 M・F)

「新入会」

◆この春に結婚しまして、働きながら忙しい毎日を過ごしています。多くの人と結婚や夫婦について、または婦人問題を話し合えたらと思っています。よろしくお願いいたします。(東京 鳥海美佐江)

◆三十三歳、中学校教員、ただいま育児休業中です。(名古屋 岡田美智子)

◆三十四歳、主婦。夫と子ども三人。積極的に生きるために自分をみつめ直しています。(栃木市 杉本八重子)

◆先日へあごろ九州の学習会に初めて参加しました。これからも時間の許すかぎり参加したいと思っています。

(春日市 渡辺嘉津子)

◆二十七歳、一年間の育児休暇の後、退職いたしました。現在、子ども一歳二か

〈あごろ〉15周年記念全国大会は8月8日・9日、東京で

東京駅から十分、八丁堀の勤労福祉会館で開きます。第一日は、講演とエンターテイメントの集い。第二日は分科会……。ことしのこの日はあけておいてネ。宿泊ご希望の方はお早くお申し込みを。またプランニングの上手な方、下働きの得意な方、仲間を楽しくする方、ぜひ準備委員になって下さい。

あごろ事務局 03-3544-3941

月。以前は視覚障害者福祉施設で働いておりました。(東京 高橋真由美)

◆現在勉強しながら仕事をしています。自分の日常を生かして、皆様と共に考え話し合い、行動したい。三十代ですが独身なので、比較的自由があるかもしれません。(川崎 田中啓子)

〔編集後記〕

『月刊』をもう少しレベルアップしようという話が運営会議でまとまったのは一月十四日なのに、二十五日に届いたへ九州からの原稿は、さすが迫力いっぱい。「欲しいね」と話し合っていた「均等法その後」もシッカリ書き込まれていて、事務局にも春があふれました。それにしても、よい原稿の陰には必ずよい活動があることを改めて感じています。すばらしいへ九州の皆さん、ほんとうにありがとう (C)